

地域区分を どのようにとらえさせるか

広島大学附属中学校 伊藤直哉

はじめに

さまざまな地域区分図をみた生徒は、「三重県は近畿地方ですか、中部地方ですか？」という質問にやってくる。新潟県、山梨県についても同じ質問が多い。そのような生徒には、「何のために、それを知りたいの？」と聞き返す。そう問うことで、地域区分が何かの目的のために行うコミュニケーションだと気づかせたい。その気づきこそが、地域区分を学ぶときのポイントだと考えるからである。

2 地域区分の2つの役割

地図は、コミュニケーション手段である。

地図は、地域をより正確に伝えることが唯一の役割のように思われるが、キリスト教世界のTO図のように、ある人の解釈や構想を伝え、地域や社会を形成する役割も持ち得る。¹⁾

地理授業において、地域区分を表す地図が果たす役割も同様に2つあるだろう。

- (1) 分析としての地域区分
- (2) 構想としての地域区分

「分析としての地域区分」は、分析のために複数の地域に区分する。たとえば、農業地域区分、気候区分、食文化区分（丸もちと角

もち、こんぶだしとかつおだし）などがある。ただ、調査や分析にもとづく客観性があるため、生徒は、その地域区分を現実にとらえ、誰かが何かの目的のために区分したものとはとらえにくい。

「構想としての地域区分」は、道州制のような地域づくりの構想を実現させるために、地域を区分する。たとえば、五畿七道、電力会社の営業範囲などがある。ただ、構想が現実に制度化されていると、生徒にはその地域区分が現実とうつり、誰かが何かの目的のために区分したものとはとらえにくい。

つまり、2つの地域区分は、理由は異なるが、生徒がコミュニケーション手段としてとらえにくい傾向にある。この傾向を問題として意識し、取り組んだ授業展開例を紹介する。

3 問題意識と授業展開例

(1) 分析としての地域区分

地域区分図を生徒に提示すると、「ふ～ん、こうなってるのか」という反応が多い。分析がすでにできあがっていて、疑問をさしはさむ余地がないのだろう。しかし、地域区分は作品ではなく分析作業としてとらえさせたい。

そのような問題意識を持って、日本の気候区分図を授業で取り上げた。この図は、生徒たちが小学生のときに教科書や地図帳で目にしてきたものである。なかには、山脈の風上

で雨が降るという知識を持つ生徒もいた。
そこで、意地悪な質問から授業をはじめた。

- Q 1：島根県は、どうして「太平洋側の気候」に区分されているのかな？
Q 2：下北半島の東部は「日本海側の気候」になっているね。どうして？



「中学生の地理 初訂版」 p.37

「(山口県に) 高い山がないから (Q 1)」、
「太平洋に近いから (Q 1)」という意見がすぐに出た。しばらくして地図帳 (p.115) を見て「対馬海流があるから (Q 1)」という意見も出た。「間違いじゃないけど、それだけでは境界線は引けないよね。」とさらに具体的な答えを求めた。そして、徐々に生徒を地域区分を行う立場に導いていくため、次のように問いかけた。

- Q 3：そもそも、この気候区分の境界線は、どうやって引かれたのかな？

こう言うと、客観的な基準で区分しなければならぬと考えたのだろう、気候区分図と地図帳を見比べはじめた。

やはり「奥羽山脈が分かれ目になってる」

と答える生徒が出た。そこで、地図帳の東北地方のページを開かせた。そこに気候区分図を見ながら鉛筆で「太平洋側の気候」と「日本海側の気候」の境界線を書き込ませてみた。

すると、岩手県では奥羽山脈の尾根とはあまり一致しない。むしろ、ふもとを通ることが多い。青森県では、八甲田山ではなく馬淵川に沿って引かれていることがわかった。こうして生徒たちは、単純に尾根に境界線を引いたのではないと考えるようになった。

そこで、分析作業を行う人の立場にたせようと、1つのエピソードを紹介した。『「カップうどんのスープのだし」の境界線は、その会社の営業マンが東京から大阪まで、駅のうどん屋さんを食べ歩いて境界線を決めたそうだよ」と話し、地道な調査にもとづく地域区分の例として下図を示してみた。



「中学生の地理 初訂版」 p.37

「気温や降水量ははかって歩けんよ」、「でも何かのデータに頼らんと線は引けん」という声も出た。そこで、気候のデータがたくさん載っている地図帳の116ページを開いて比べさせた。まもなく、「冬の降雪量と気候区

分がよく似ている」という声が出た。ほぼ正解であった。

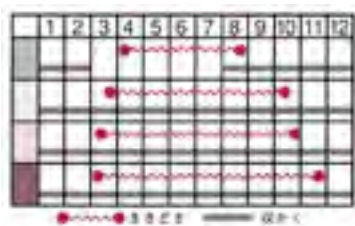
一般的な日本の気候区分図は、気候をその成因によってとらえる動態気候学に基づくものが多い。²⁾ とくに、西高東低の気圧配置のなかで、雪が降るか、降らないか、あるいはその中間かによって日本海側と太平洋側の気候を区分している。島根県は益田市のあたりで積雪がなくなるため太平洋側の気候に区分され、下北半島は東部まで積雪があるため日本海側の気候に区分される。そうすることで、日本の気候を冬の季節風（西高東低の気圧配置）という成因によって説明するための図となる。以上のように図の目的を解説した。

こうした作成者の目的や苦勞にふれ、教科書で目にする地域区分図に親しみや敬意を持ってもらえれば学習意欲につながろう。

ただ、この気候区分図も万能ではない。そのことに気づかせる作業学習も行った。

Q 4：ニンジン、どの地域でいつごろ植えればよいか。地域区分図をつくろう。

正解は種の袋の裏側にある。まず、「まきどき」、「収かく」をみると、ニンジン栽培は発芽温度が重要なため、春先の気温で区分する。それがわかっているならば、緯度や海拔高度を参考にして自分なりの区分図が作れる。



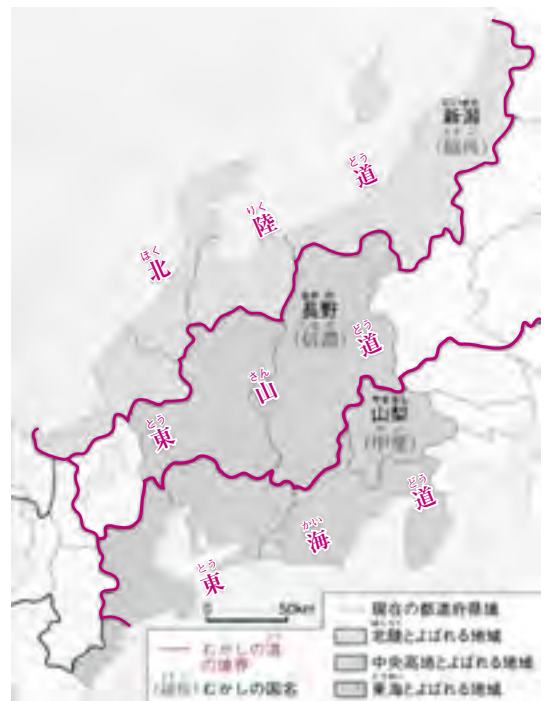
「時なし五寸人参のまきどきと収かく」



「時なし五寸人参の気候区分」

(2) 構想としての地域区分

下図は、日本で最も古い地域区分といわれる五畿七道が読み取れる。



「中学生の地理 初訂版」p.37

Q 5：五畿七道という地域区分は、何のためにつくられたのだろう。

この問いは、歴史の授業がこの時代まで進めば、「都からの命令や伝達をよくするため」というような解答が出る。すると、「だれがつくったの?」という問いにも「支配する立場のものがつくった」という答えも出てくる。

問題は、五畿七道を知っているのに、現在

の都道府県の枠組みを相対化できる生徒が少ないことである。

そこで、地図帳の旧国界（1点鎖線）が役に立つ。たとえば、但馬牛の発祥と全国展開について学習するとき、「なぜ兵庫県（北部）で」という問いよりも、「なぜ但馬で」という問いのほうが、平野の少なさや他地域との交通の不便さを把握しやすい。地理学習では、思考するときのスケールを変えることで、より多面的に思考することができる。だが、生徒が地域区分を相対化できなければそれは望めない。構想され制度化された地域区分を相対化するような思考技能が必要となろう。

そこで、構想が地域区分として表され、国土や地域の形成につながることを理解させる授業を試みた。教材には、太平洋ベルト構想を選び、次のような投げかけからはじめた。

【説明】1960年代に「国民の所得を2倍にしよう！」という人が現れました。池田勇人首相です。彼は、四大工業地帯の間に、新しく工業地域を發展させ、太平洋ベルトをつくれればよいと考えました。

では、自分で日本地図を描き、太平洋ベルトをかき込んでみよう。

構想を語る文章も、実は描いてみれば地域区分になっている。それに、気づかせる作業である。たとえば、次のような図が描かれた。



「ある生徒の描いた太平洋ベルト」

Q 6：太平洋ベルト以外の地域が2つできたね。なんと名前をつけようか？

名前をつけるためには、太平洋ベルトとその北東地域、南西地域との関係を学習しなければならない。そこで「これから、日本の諸地域を学びながら、2つの地域の名前を考えてみようね」と今後の動態地誌学習につなぐ終わり方をした。

4 おわりに

新学習指導要領は、改訂の趣旨において公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを掲げている。地理学習は、今ある地域や社会を理解するにとどまらず、それらを相対化しあらたに形成することが求められよう。

生徒には「今」や「これまで」を分析して地域区分し、「これから」を地域区分として構想する力が必要となろう。そのためには地域区分は目的ではなく、社会を形成してゆくコミュニケーションの手段としてとらえさせることが必要になると思われる。

参考文献

- 1) 若林幹夫『地図の想像力』講談社選書メチエ 1995
- 2) 前島郁雄「総観気候学の研究－本邦冬季の降水について－」東京大学理学部地理学教室『東京大学地理学研究』1954 No. 3 p.127～148